基本連鎖の第一成分における談話不変化詞 Okay

George O'Neal

Abstract

This paper examined the effect of sequential position on the functions of the discourse particle "okay" in American English conversations. Although the discourse particle "okay" appears in many sequential positions, it has a salient tendency to appear in base sequence second pair part and base sequence closing third positions. In such positions, the discourse particle "okay" performs culminating actions: sequential closure and transition; i.e., it indicates that a sequential activity has finished. However, when the discourse particle "okay" is deployed after a pre-sequence in base sequence first pair part position, its function is conspicuously different from its base sequence second pair part and base sequence closing third position functions. When deployed after a pre-sequence in base sequence first pair part position, the discourse particle "okay" adumbrates an extended telling; i.e., it foreshadows extended discourse.

キーワード……談話不変化詞 Okay 会話分析 談話標識 連鎖的位置

1　はじめに

談話不変化詞 Discourse Particles と談話標識 Discourse Markers は会話に溢れていると言っても過言ではない。 Jucker & Smith (1998)によれば、談話標識はほぼ 5 秒ごとに会話に現れる。談話標識と談話不変化詞は会話に頻繁に現れるだけではなく、会話の成り行きに著しく影響するということも指摘されている（Ruhlemann 2007)。談話標識と談話不変化詞は「会話の矢印」として機能し、会話の当事者にとって、大事な合図である。

しかし、談話標識と談話不変化詞をめぐる議論は会話における機能と役割を軸に行われる経歴がある。例えば、Schiffrin (1987)は談話標識の機能を五つの談話的構造に位置づけた。Schiffrin の先駆的な研究以来、Schiffrin の「談話的構造」に基づいている解説は、関連性理論による解説に取って代わり、その結果、談話標識の研究が前進した。だが、談話標識と連鎖的位置 sequential position の関係に焦点を当てた研究は皆無に近い状態である。談話標識と連鎖的位置

は密接な関係があり、影響し合っていると考えられる。本稿では談話不変化詞 okay の連鎖的位置に研究の焦点を絞り、談話不変化詞 okay の連鎖的位置と機能の関係を解明する。談話不変化詞 okay が会話に果たす機能を識別するには、談話不変化詞 okay が占める連鎖的位置を突き止める必要があるということが本稿の主張である。

2　先行研究

本稿の論点は三つの概念を基盤としている。その概念は「連鎖的位置 sequential position」と「談話不変化詞 discourse particle」と「連鎖的位置への感応性 sensitivity to sequential position」である。本節で、この概念の詳細を説明する。

2.1 連鎖的位置

本節では、「連鎖 sequence」と「拡張連鎖 expanded sequence」と「連鎖的位置 sequential position」の概念に関する解説を試みる。こういう概念は会話分析に由来する。本稿は、連鎖的位置が談話不変化詞 okay の意味に影響するという仮定に基づいているので、連鎖的位置を詳しく紹介する必要がある。

2.1.1　連鎖

会話分析が長い間指摘してきたように、会話は組織化されている活動である。会話の参与者は次々と発話の順番を交代するが、発話の順番の交代は手当り次第でも、無作為でもない。会話はルールに従い、前進する活動である。例えば、参与者 A は質問を参与者 B に聞けば、参与者 B は答えるだろう。同じように、参与者 A は参与者 B に挨拶をすれば、参与者 B は挨拶を返すだろう。会話の参与者は単独で発話を生産するが、会話そのものは単独の行動ではなく、参与者が構成する過程である。つまり、会話は異なる参与者によって生産された発話で組み立てられている。

会話分析は、他の発話の生産を要求する発話を「第一成分 first pair part」と呼ぶ（Schegloff 2007: 13）。だが、第一成分が他の発話を求める場合、それはいかなる発話でもよいわけではない。第一成分は第一成分に合う発話を要求する。言い換えれば、第一成分はある特定の発話が生産されるよう期待する。第一成分によって設定された期待に合う発話は「第二成分 second pair part」と呼ばれる（Schegloff 2007: 13）。第二成分は第一成分に応答する発話である。したがって、第二成分は第一成分によって限定される発話である。

「基本連鎖 base sequence」とは、「第一成分」と「第二成分」が結びついている状態である（Schegloff 2007）。「基本連鎖」は、他の発話を要求する発話と要求に応じる発話のペアで構成されている。会話は少なくとも二人で構成されている活動なので、相互行為の観点から見れば、基本連鎖は会話の基本的な単位となる。「基本連鎖」は「隣接ペア adjacency pair」とも言われ

るが、基本連鎖は必ずしも発話のペアだけで構成されているわけではないので、「隣接ペア」という用語を放棄し、この単位を引き続き、「基本連鎖」と呼ぶことにする。

2.1.2 拡張連鎖

会話はいくつかの連鎖で構成されているが、一つの第一成分と一つの第二成分だけの基本連鎖で構成されている会話は極めて珍しい（Tsui 1994: 27）。実は、普通の会話はそれ以上の発話の連鎖で構成される傾向が非常に強い。つまり、連鎖は頻繁に拡張される。拡張される連鎖は拡張連鎖という（Schegloff 2007）。

拡張連鎖は三つ以上の発話で構成されている連鎖である。追加される発話は基本連鎖の周辺に集結する。連鎖が拡張できる位置は三つある。基本連鎖の前に現れる連鎖は「先行連鎖 pre-sequence」という（Schegloff 2007: 28-57）。先行連鎖は基本連鎖の第一成分の出現を示唆するだけではなく、基本連鎖の第一成分はいかなる発話であるかを仄めかす（Terasaki 2004）。基本連鎖の第一成分と第二成分の間に挿入される連鎖は「挿入連鎖 insert sequence」という（Schegloff 2007: 97-114）。挿入連鎖は基本連鎖の第一成分に応じる第二成分を生産する条件を確認するためにも、発話の修復のためにも使用される。最後に、基本連鎖の第二成分の後に生産される、新たな第一成分をなさない発話は「連鎖終了成分 sequence closing third」という（Schegloff 2007: 115-167）。連鎖終了成分は主に第二成分への理解を表明するためにも、第二成分を評価するためにも使用される。他の拡張と違い、連鎖終了成分は連鎖ではない場合が多い。

2.1.3 連鎖的位置

会話においては、いかなる発話でも連鎖の一部である。したがって、いかなる発話でも連鎖のどこで発生するかによって、「発話の位置」が特定できる。だが、位置はそもそも他の位置に依存する相対的な概念であるので、ある発話が第二成分であることは、他の発話が第一成分であるということに依存している。ある発話の位置はあくまでも他の発話の位置との比較で、決まることである。ある発話が基本連鎖の第一成分であるとすれば、その発話は「基本連鎖の第一成分」という「発話の位置」を占めている。同じように、ある発話が先行連鎖の第二成分であるとすれば、その発話は「先行連鎖の第二成分」という「発話の位置」を占めている。

「発話の位置」は必ず「連鎖」という概念の内部構造に依存するので、これから、「発話の位置」という用語に代えて、「連鎖的位置」という用語を採用する。いかなる発話でも、ある「連鎖的位置」を占めている。「連鎖的位置」という概念は他の「連鎖的位置」を想定する相対的な概念だが、談話不変化詞の役割を識別するにあたり、有用な概念だと考えられるので、これからの分析の大切な一部となる。次節では、談話不変化詞とは何かを見てみよう。

2.2　談話不変化詞

2.2.1 談話不変化詞の定義

本節では、考察対象である談話不変化詞 okay が属している範疇である「談話不変化詞」の特徴を明らかにする。なお、談話不変化詞 okay を記述するためにより広く使われる「談話標識」という概念と比較しながら、談話不変化詞を定義する。

長い間、言語学者は談話標識を言語運用の間違いとして片付けてきた。特に統語論を重視した学者は談話標識が構文の構造の一部をなさないため、談話標識を研究する価値を否定した。しかも、談話標識は分析に値することを認めた学者でも談話標識をいかに研究すればよいか迷った。しかし、時間を経るにつれ、談話と談話標識に対する興味が高まった。Schiffrin（1987）の分析は談話標識の研究を大きく発展させた。Schiffrin によれば、談話標識は「談話の単位を区切る、連鎖に依存的な要素である」（1987: 31）。他の研究者は Schiffrin の定義を引き継ぎ、談話標識の研究をさらに深めた。

だが、談話標識の研究に携わっている学者は大きな問題に直面した。「談話標識とは何か」ということである。何が談話標識で、何が談話標識ではないかという区別は簡単ではない。談話標識は自然な品詞をなさないため、不自然な、異質的な範疇だという（Fischer 2006）。談話標識はいくつかの異なる語源から派生している語なので、談話標識を説明する際、すべての談話標識に当てはまる特徴を特定するのは不可能であるため、談話標識を説明するにはより柔軟な分類方法が求められる。Fischer（2006）は談話標識の特徴により当てはまる語は「より談話標識的」だとし、談話標識の特徴により当てはまらない語は「より談話標識的ではない」とするので、談話標識の異質性を隠さない分類方法を確保した。本稿は Fischer の分類方法を採用する。

「より談話標識的」な談話標識の特徴とは何だろう。Blakemore（2002）と Brinton（1996）と Schiffrin（1987）が挙げる談話標識の特徴を統合し、羅列すれば、以下の通りとなる。純粋な談話標識は以下のすべての特徴に当てはまる。1）統語論的に構文の一部とならない。2）文頭に現れる。3）任意的である。4）韻律的に構文から切離されている。5）構文の心理条件に影響しない。6）構文が表す情報を処理する手続きを相手に伝達する（手続き的意味）。

しかし、上述した特徴だけで談話標識が的確に特定づけられるという立場は、最近、疑問視されるようになった。例えば、Borderia（2008）と Fraser（2006）は Blakemore（2002）の立場に意義を唱えた。Borderia（2008）と Fraser（2006）によれば、談話標識は一般的に手続き的な意味を表すが、ある談話標識は構文の真理条件に影響するので談話標識には手続き的な意味しかないとは言えない。つまり、談話標識は主に手続き的な意味を持っているものの、談話標識が構文の真理条件に影響する場合もある。したがって、上の特徴を訂正する必要がある。談話標識は主に手続き的意味を持っているが、ある程度、構文の真理条件に影響する「概念的な意味 conceptual meaning」を持つ場合もある。

さらに上の特徴付けにはもう一つの問題がある。それは、連鎖的位置による影響を無視しているということである。O'Neal（2010）は分節音素的にも、超分節音素的にも同一の談話不変化詞 oh の連鎖的位置を変えるだけで、談話不変化詞 oh の意味が変わることを証明した。つまり、異なる連鎖的位置にあれば、談話不変化詞の意味が変わるので、連鎖的位置の影響は重要である。したがって、談話標識は「連鎖的位置に感応的 sensitive to sequential position」という特徴も上のリストに追加する必要がある。

最後に、以前持っていた意味論的意味が残っている程度によって、談話標識をさらに分類する必要がある。Fischer（2006）の提案によれば、以前持っていた意味論的な意味がある程度残っている I mean と you know はそのまま「談話標識」とした方がよいが、以前の意味論的な意味が薄れた談話標識は「談話不変化詞」に下位分類した方が適切だ、と言う。この提案に従えば、談話不変化詞 well と談話不変化詞 okay は以前の意味論的な意味が残っておらず、以前と随分異なる機能を談話において果たすため、談話標識ではなく、談話不変化詞となる。

本稿では談話不変化詞を以下の特徴に基づき定義するが、すべての談話不変化詞はすべての特徴に当てはまるわけではないので、より多くの特徴に当てはまる語はより純粋な談話不変化詞の例とし、より少ない特徴に当てはまる語は談話不変化詞になりかけているとする。純粋な談話不変化詞を新たに定義すると、は以下のようになる。１）統語論的に構文の一部とならない。２）一義的な意味がある。３）文頭に現れる。４）任意的である。５）韻律的に構文から切離されている。６）構文の心理条件をあまり影響しない。７）構文が表す情報を処理する手続きを相手に伝達する。８）以前持った意味論的な意味がなくなった。９）連鎖的位置に感応的である。

2.3　談話不変化詞は連鎖的位置に感応的である

本節では連鎖的位置による談話不変化詞が表す意味への影響を探る。談話不変化詞は連鎖的位置に著しく束縛されていると主張する学者がいる。例えば、Jucker & Smith (1998) によれば、すべての談話不変化詞は、それが発生する連鎖的位置によって二つの範疇に分類できる。この立場によると、すべての談話不変化詞は「第一成分」、または「第二成分」という連鎖的位置にしか現れない。第一成分にしか現れない談話不変化詞は「提示標識 presentation markers」である。談話不変化詞 like、so、well と談話標識 you know、I mean は提示標識である。提示標識は連鎖を始める談話不変化詞である。他の談話不変化詞は「第二成分」にしか現れない。談話不変化詞 oh、yeah、okay は「受諾標識 reception markers」である。受諾標識は第一成分を受け止め、第二成分の冒頭に現れる談話不変化詞である。この仮説の前提は「第一成分と提示標識」と「第二成分と受諾標識」は似た目的があるので一緒に現れるのは当然だという点である。

しかし、Jucker & Smith（1998）の仮説は「決定主義」に基づいていると言わざるを得ない。Jucker & Smith の論理に従えば、受諾標識は第一成分に絶対現れず、提示標識は第二成分に絶

対現れないという結論に導かれる。だが、受諾標識である談話不変化詞 oh、yeah、okay は第二成分にも、終了連鎖成分にも現れる回数が比較的に多いことが認めたとしても、第二成分、または連鎖終了成分にしか現れ得ないという結論は間違っている。なぜなら、回数は少ないとは言え、談話不変化詞 oh、yeah、okay は連鎖を開始する場合があるからである。O'Neal（2010）は、談話不変化詞 oh が第一成分にも第二成分にも現れることだけではなく、現れるところによって、意味が変化することも証明した。しかも、Jucker & Smith によれば、談話不変化詞 well は第一成分にしか現れない提示標識だが、Fuller（2003）は談話不変化詞 well が第二成分に現れることが多いので、談話不変化詞 well を受諾標識として再分類している。つまり、「受諾標識」と「提示標識」という範疇そのものは固すぎるので、本稿では採用しない。

だが、Jucker & Smith の根本的な主張は間違っているわけではない。というのは、談話不変化詞が連鎖的位置に影響されるという仮説自体は間違っているわけではないからである。しかし、連鎖的位置による影響は Jucker & Smith が推定するほど強い束縛ではない。第一成分、または第二成分は属している談話不変化詞に影響するが、表す意味自体を決定するわけではない。本稿の仮説は談話不変化詞 okay が表す機能は連鎖的位置に影響されているということである。したがって、この仮説は、基本連鎖の第一成分に現れる談話不変化詞 okay と基本連鎖の第二成分に現れる談話不変化詞 okay の意味は異なると想定する。談話不変化詞 okay の先行研究を次節で紹介する。

2.4 談話不変化詞 okay

本節では、談話不変化詞 okay の先行研究を紹介する。本稿は連鎖的位置がいかに談話不変化詞 okay に影響しているかを検討しているので、先行研究が分析した談話不変化詞 okay の連鎖的位置を軸に先行研究を紹介する。

2.4.1 先行連鎖に現れる談話不変化詞 okay

先行連鎖の一部として現れる談話不変化詞 okay を初めて研究したのは Schegloff & Sacks (1973)である。Schegloff & Sacks (1973)によれば、談話不変化詞 okay は、会話を終了させる終わりの挨拶の連鎖を会話中に導入する「会話終了先行連鎖 conversation pre-closing sequence」の第一成分と第二成分に現れる。基本的に Button（1990）と Beach（1995a）は Schegloff & Sacks (1973) の結論を支持している。しかし、この分析には問題点がある。Tsui（1994）が指摘したように、いわゆる会話終了先行連鎖における談話不変化詞 okay は新しい連鎖の第一成分を導入していないという分析も可能である。観点を変えれば、終わりの挨拶の連鎖を会話に導入する会話終了先行連鎖に現れる談話不変化詞 okay は基本連鎖の第二成分の後に発生した二つの連鎖終了成分だと分析することも可能であるので、この研究は不十分だと言わなければならない。

2.4.2 基本連鎖の第一成分に現れる談話不変化詞 okay

基本連鎖の第一成分に現れる談話不変化詞 okay の先行研究は少ないが Condon & Cech（2007）によれば、それは会話の参与者が期待している次の課題を談話に導入する。言い換えれば、基本連鎖の第一成分の最初の語が談話不変化詞 okay であれば、話し手は終わった連鎖から必然的に出る課題に取り組みたい意図を表す。しかし、この分析はこれから紹介する他の学者が行った基本連鎖の第二成分に現れる談話不変化詞 okay の分析に酷似している。唯一の違いは連鎖的位置だ。それは談話不変化詞 okay の連鎖的位置を特定する基準の曖昧さを伴う分析の結果である。Condon & Cech（2007）は基本連鎖終了成分に発生する談話不変化詞 okay と基本連鎖の第一成分に発生する談話不変化詞 okay を識別する方法を明記していないので、Condon & Cech が特定している基本連鎖の第一成分に現れる不変化詞 okay を連鎖終了成分として解釈することは可能である。したがって、この研究も不十分だと言わざるを得ない。

2.4.3 挿入連鎖に現れる談話不変化詞 okay

談話不変化詞 okay の挿入連鎖における役割と現れる回数は限定的である。談話不変化詞 okay は挿入連鎖に現れないわけではないが、挿入連鎖に現れる談話不変化詞 okay と基本連鎖の連鎖終了成分に現れる談話不変化詞 okay の役割は同じである。というのは、挿入連鎖における談話不変化詞 okay の主な機能は挿入連鎖を終了させることであり、挿入連鎖における談話不変化詞 okay は挿入連鎖の第二成分、または連鎖終了成分から基本連鎖の第一成分への移り変わりをマークする（Schegloff 2007）。

2.4.4 基本連鎖の第二成分と連鎖終了成分に現れる談話不変化詞 okay

第二成分と連鎖終了成分に現れる談話不変化詞 okay の先行研究は多い。それは談話不変化詞 okay が連鎖の第二成分と連鎖終了成分の一部として頻繁に生じるためである。 談話不変化詞 okay が第二成分と連鎖終了成分に現れることは偶然ではない。基本連鎖の第二成分と連鎖終了成分が会話でなす役割と、談話不変化詞 okay の役割は重なるので、自然な重複である。

第二成分と連鎖終了成分に現れる談話不変化詞 okay の最も基本的な役割は連鎖を終了させる合図だと多くの学者が結論づけている。ある学者によれば、談話不変化詞 okay が第二成分、または連鎖終了成分の一部として現れるならば、連鎖を完成させ、終わらせる合図として機能する(Button 1987, 1990)。さらに、談話不変化詞 okay を発する話し手は、先の連鎖が行おうとしている行為を認識していることを表す。最後に、談話不変化詞 okay は次の基本連鎖の第一成分が出現できる空間を開けておくという二次的な機能も備わっている(Beach 1995a, 1995b)。

さらに、談話不変化詞 okay は段階に分かれている言語活動の段階を結びつけ、話し手はさらに話したい意図を表す。談話不変化詞 okay は談話のある段階から別の段階への移り変わりをマークするだけではなく、同じ話し手による新たな発話の生産も示唆する。例えば、談話不変化

詞 okay は電話での会話の挨拶の段階から最初の話題への移り変わりをマークする（Schegloff 2010）。会議において談話不変化詞 okay は会議の挨拶の段階が終わり、会議が本格的に始まったことを示す（Condon 2001）。会話において談話不変化詞 okay は先行した話題を閉じ、次の話題への移り変わりをマークする（Beach 1990, 1995a）。客と店員との会話において、談話不変化詞 okay は会話の「売買の確認」の段階と「支払い」の段階への移り変わりを結びつける（Merritt 1984）。行おうとしている活動を完成させるには、物理的な動作が不可欠な会話において、談話不変化詞 okay は活動のある段階から次の段階への移り変わりをマークする（Bangerter & Clark 2003）。最後に、いくつかの決定が必要な会話において、談話不変化詞 okay は決定済みの話題から決定を求める次の話題への移り変わりをマークする（Condon 1986）。

3　分析方法

談話不変化詞 okay と連鎖的位置がいかに密接に結び合っているかを検討するために、談話不変化詞 okay の例を多く収集する必要がある。そのために、サンタバーバラ大学のアメリカ英語の話し言葉のコーパス The Santa Barbara Corpus of Spoken American English Part 1（これから、SBCSAEP1 と称する）に現れた談話不変化詞 okay を検索した。SBCSAEP1 は、www.talkbank.org でアクセスできる、サンタバーバラ大学の談話研究部によって作成された自然なアメリカ英語の話し言葉のコーパスである。SBCSAEP1 は１４個の自然な会話のサウンドファイルを含んでおり、それぞれの会話のサウンドファイルは１５分から３０分ぐらいである。SBCSAEP1 は「会話文 transcript」もある（Du Bois, Chafe, Meyer, & Thompson 2000）。

談話不変化詞 okay と連鎖的位置の関係を明らかにするために、SBCSAEP1 に現れたすべての okay を集計した上で、談話不変化詞 okay と他の okay を識別しなければならなかった。SBCSAEP1 に現れた okay は談話不変化詞 okay だけではない。概念的意味のある文字通りの okay も、付加疑問文の文末についた okay も、文頭に現れない引用文の一部であった okay も、会話文の脱文による意味不明の okay もあったが、本稿の 2. 2. 1 に指定した談話不変化詞の特徴に当てはまる okay だけを談話不変化詞 okay として扱い、他の okay を分析の対象から除外した。すべての談話不変化詞 okay を特定した上で、談話不変化詞 okay が置かれた連鎖的位置も特定した。それから異なる連鎖的位置に置かれた談話不変化詞 okay が談話中で果たしている役割と機能を検討し、相違があるかないかを確かめた。発見した相違の詳細を次節で報告し、説明する。

4　分析の結果

SBCSAEP1 において、談話不変化詞 okay の最も基本的な役割は基本連鎖の終了と関係がある。談話不変化詞 okay が第二成分と連鎖終了成分に現れる例は SBCSAEP1 に溢れている。談話不変化詞 okay の最も基本的な機能は以下の例 1 で示される。

例 1：SBCSAEP1 の CHA08

262　*REBE:　Do you know how much it's gonna be？（基本連鎖の第一成分）
（いくらぐらいになるか分かる？）
263　*RICK:　(..) Oh no （基本連鎖の第二成分の開始）
264　not yet. （基本連鎖の第二成分の完了）
（いや、まだ）
265　*REBE:　Okay.（連鎖終了成分）
（そうか）

例 1 における唯一の連鎖は Rebe が Rick に聞く「いくらぐらいになるか分かる？」という質問で始まる。質問は質問に応答する返答を要求するので、この発話は基本連鎖の第一成分である。最初の発話に対して Rick は「いや、まだ」と言い返し、Rebe が聞いた質問に答える発話を生産したので、Rick の発話は基本連鎖の第二成分である。だが、この連鎖は第二成分だけで終わらない。Rebe が言う「okay」は Rick の第二成分に対して理解を表し、基本連鎖が終了に至ったことを表す。談話不変化詞 okay が果たす役割の一つは基本連鎖を終了に導くことである。

ところが、談話不変化詞 okay は必ずしも基本連鎖を終了させるものではない。基本連鎖の終了を示唆せず、逆にさらなる発話の生産を示唆する談話不変化詞 okay もある。例 2 に Alin と Leno という兄弟は母親と妹の親しくない関係について話し合っているが、談話不変化詞 okay は基本連鎖終了成分に置かれていない。320 行目に置かれている談話不変化詞 okay は基本連鎖の第一成分に発生している。

例 2：SBCSAEP1 の CHA06（「息の吸い込み」は「.hh」で示される）

317　*ALIN:　(..) Did I tell you
318　about when Mom was having Arnold and Lisabeth over for lunch
319　finally. （先行連鎖の第一成分）
（ねぇ、お母さんは結局アルノルドとリザベスを昼食に招待したって言ったっけ？）
（レノは首を横に振り、「知らない」と合図をする）（先行連鎖の第二成分）
320　*ALIN:　(..) .hh Okay （基本連鎖の第一成分の開始）
321　well
322　(.) Mom (笑).
（そう、で、お母さんが（笑））
323　*ALIN:　(.) They call up in August
324　and go
（彼らは８月にお母さんに電話して）
325　(.) I mean it's
326　(.) Daddy's been dead what
327　seven years

（まあ、お父さんが死んで、もう７年だろ）

328 and finally it dawns on Lisabeth

329 that she doesn't see Mom that much .

（で、ようやくリザベスはお母さんにそんなに長く会っていないっていうことを気づいたわけ）

330 *ALIN: (..) Well

331 it's cause she n-.

（で、それで彼女は）

332 *ALIN: (.) I know

333 she never calls her

334 right?

（まあ、彼女の方からお母さんに絶対電話しないだろ？）

335 *ALIN: .hh So Mom

（それで、お母さんはね）

336 *LENO: （唾を飲み込む音をする）

337 *ALIN: hh. She just goes

338 I feel like you've got a whole other w:orld outside of us

339 like you don't even need us Mar

340 and that you have a whole other life.

（リザベスはね、あたしたちのことが要らないじゃないかと思う時あるよとお母さんに言った）

341 *LENO: .hh

342 *ALIN: Mom said I do. （基本連鎖の第一成分の終了）

（お母さんは、そうだろうって）

343 *ALIN: (笑)

344 .hh Well .

（じゃ）

345 *LENO: .hh Poor Lisabe:th .（基本連鎖の第二成分）

（リザベスは可哀想だね）

例２における相互行為は「ねぇ、お母さんはアルノルドとリザベスを昼食に招待したことを言ったっけ？」という Alin の質問で始まる。だが、この質問は基本連鎖の第一成分ではなく、先行連鎖の第一成分である。この質問が先行連鎖の第一成分である理由は、この質問が同じ話し手によるさらなる情報伝達を「予測可能 projectable」にするからである。というのは、Alin が聞く質問は確かに Leno が既に「アルノルドとリザベスの件」のことが知っているかをチェックしているものの、それだけではない。Alin は、「アルノルドとリザベスの件」の情報を伝達する基本連鎖の第一成分を生産する許可を求めている。言い換えれば、Alin が基本連鎖の第

一成分を生産する可能性は Leno の応答に依存しているのである。もし Leno が既に「アルノルドとリザベスの件」を知っていることを表す先行連鎖の第二成分を生産すれば、Alin の方は、先行連鎖の第一成分が予測可能にした基本連鎖の第一成分を生産しないだろう。逆に、Leno が「アルノルドとリザベスの件」を知らないことを表す先行連鎖の第二成分を生産すれば、Alin は先行連鎖の第一成分が予測可能にした基本連鎖の第一成分を生産するだろう。実際には、Leno は首を横に振り、非言語的合図で「アルノルドとリザベスの件」を知らないと伝えた。つまり、Leno は Alin の先行連鎖の第一成分が予測可能にした基本連鎖の第一成分を生産する許可を Alin に与えた。

Leno が先行連鎖の第二成分を生産した後、Alin は間を置かずに、さらなる発話の生産を仄めかす「息を吸い込み in-breath」をしてから、基本連鎖の第一成分の最初の語である談話不変化詞 okay を言い、320 行目から 344 行目まで続く「長い情報伝達 extended telling」を生産した。Alin はついに 342 行目に至って長い情報伝達の結末を伝え、基本連鎖の第一成分を終える。情報伝達が期待する第二成分は、第一成分が表す情報に対する何らかの評価である。342 行目で Alin の長い情報伝達は終わったが、Leno が評価をすぐ下さなかったので、Alin が well を言い残し、Leno に基本連鎖の第二成分を生産する新たなチャンスを与えた。Alin が well を言ったすぐ後、Leno は 345 行目に「リザベスは可哀想だね」と言い、Alin が伝えた情報を評価する。

ここで注目に値するのは、談話不変化詞 okay が先行連鎖の第二成分の直後の基本連鎖の第一成分である長い情報伝達の最初の語として現れたことである。談話不変化詞 okay は「息の吸い込み」の後に発生したことも非常に大切である。実は、長い情報伝達を伝達する際、談話不変化詞 okay が長い情報伝達の最初の語として現れることは普通である。つまり、先行連鎖の第二成分の直後の談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」は長い情報伝達の生産を仄めかす。

しかし、基本連鎖の第一成分の最初の語として現れる談話不変化詞 okay は長い情報伝達が次に続くことを仄めかすが例外もある。だが、例外の場合でも会話の参与者は普通の状況を意識している。一見したところでは、次の例 3 に現れる会話は今までに述べたことに反する例のように見える。例 3 の基本連鎖の第一成分に談話不変化詞 okay が現れるが、長い情報伝達がないからである。しかし、長い情報伝達が生産されていないとしても、会話の当事者は長い情報伝達を想定していることを言葉で表す。例 3 に Alin は Leno にお母さんの彼氏の情報を伝達している。

例 3：SBCSAEP1 の CHA06（上昇イントネーションは「？」で示される）

13　*ALIN:　remember Tyke?　（先行連鎖の第一成分の開始）

14　*ALIN:　(.) Lived next door to Mom?　（先行連鎖の第一成分の完了）

（タイクのことを覚えている？お母さんの隣の家に住んでいた人？）

15　*LENO:　(.) ʔuh (..) Yeah:.　（先行連鎖第二成分）

（えっと、うん、覚えているよ）

16　*ALIN: ➡(..) Okay.　（基本連鎖の第一成分の開始）
（じゃ）

17　*ALIN:　.hh (.) Two weeks ago I'm watching TV
（二週間前にテレビを見てて）

18　(.) and David Horowitz is going to have
（そしたら、ディビット・ホロウィツは）

19　this former car (.) radio thief on?　（基本連鎖第一成分）
（カーラジオを盗んだ奴を番組に出演してさせてたろ）

20　*LENO:　(..) It's her boyfriend?　（基本連鎖第一成分）
（あいつは彼女の彼氏か？）

21　*ALIN:　.hh (.) Yeah　（基本連鎖第二成分）
（うん、そうだ）

以上の会話文は二つの連鎖で構成されている。最初の連鎖は先行連鎖で、先行連鎖の第一成分は Alin の質問で始まる。「何々を覚えている？」という形の質問は常に先行連鎖の第一成分をなす（Schegloff 2007: 38）。この質問は先行連鎖の第一成分をなし、質問に答える応答を要求する。Leno は「えっと、そうね、覚えているよ」と言い、先行連鎖の第二成分を生産する。

Leno が先行連鎖の第二成分を生産したすぐ後、Alin は「Okay」と言い、「息の吸い込み」をした上で、先行連鎖の第一成分によって予測可能にされた基本連鎖の第一成分を生産しはじめる。この基本連鎖の第一成分は長い情報伝達として始まるが、２０行目に Leno が口を挟み、Alin が伝えようとしている情報を Alin より先に言う。それに対して、Alin は「うん、そうだ」と言い、Leno は Alin が言おうとした情報を正しく推理したことを表明する。

一見すれば例３には長い情報伝達がないように見える。しかし、Leno と Alin の会話は Alin が長い情報伝達をしようとしたことを意識している。Alin は「カーラジオを盗んだ奴を番組に出演してさせてたろ」の発話は上昇イントネーションとともに現れる。上昇イントネーションを伴う平叙文は話し手が話す権利を維持したい意図を表すので、Alin はさらに発話を生産しようとしたことが窺える。言い換えれば、Alin の長い情報伝達は途中で終わった。しかも、Leno が口を挟み、Alin が伝えようとしている情報を先に言うことに対して Alin は「うん、そうだ」と言う。つまり、基本連鎖の第一成分は Alin が始めたが、Leno の方が早めに完成させた。基本連鎖の第一成分を言いかけた Alin は基本連鎖の第二成分を自分で生産し、基本連鎖を終了させている。

例２と例３に基づき、先行連鎖の第二成分の直後の基本連鎖の第一成分に現れる談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」が長い情報伝達の生産を示唆することを明らかにした。しかし、もちろん、先行連鎖の直後のすべての基本連鎖の第一成分が談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」で始まるわけではない。例えば、例４は先行連鎖と基本連鎖の第一成分で構成されているが、

談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」がない。

例４：Schenkein II, 38（Schegloff 2007: 39 より）

1　*BEN:　Hey I got sump'n thet's wild（先行連鎖の第一成分）
（ねぇ、すごいニュースがあるんだよ）

2　*BIL:　What（先行連鎖の第二成分）
（何）

3　*BEN:　Y'know one a' these great big red fire alarm
（基本連鎖の第一成分の開始）

4　*BEN:　boxes thet'r on the corner? I got one.（基本連鎖の第一成分の完了）
（曲がり角の所に馬鹿でかい、赤い火災報知機の箱あるだろ？俺、持ってるんだ）

例４は例２と例３に似ている。例４は情報伝達を仄めかす先行連鎖と情報伝達をする基本連鎖の第一成分がある。だが、例４の類似点はそこまでである。例４の基本連鎖の第一成分は確かに情報伝達だが、長い情報伝達ではない。Ben は伝えようとした情報をすぐ伝え、基本連鎖の第一成分を終える。談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」が例４に現れないのは、必要がなかったからである。談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」の役割は長い情報伝達を示唆することであり、そうする必要がある場合に限って現れると結論づけられる。つまり、 談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」は一言だけで表せない情報を伝えようとする意図を表明するのである。

5　結論

談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」は先行連鎖の第二成分の後に、基本連鎖の第一成分の先頭に発生すれば、相手に重要な合図を送る。先行連鎖そのものはさらなる発話の生産を示唆するので、 談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」はさらなる発話の生産を仄めかしているとは考えにくい。だが、談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」は先行連鎖の第一成分によって予測可能にされた基本連鎖の第一成分の長短を仄めかす。より正確に言えば、先行連鎖の第二成分の後に、基本連鎖の第一成分の最初の語として現れる談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」はまさに「長い情報伝達 extended telling」の生産を示唆する。肺臓に空気を吸い込んでおかなければ、生産できないほど長い情報伝達をしようとしている話し手は、先行連鎖の第二成分の後に談話不変化詞 okay を置いてから、相手に長い情報伝達をするのである。

だが、談話不変化詞 okay に導かれる長い情報伝達は珍しいと言わざるを得ない。これは長い情報伝達である基本連鎖の第一成分は先行連鎖に先行されることと関係があると考えられる。Stivers（2010）が指摘するように、先行連鎖における質問は珍しい。したがって、長い情報伝達に先行する質問も珍しいと考えてもおかしくないのである。

6　おわりに

珍しいとはいえ、談話不変化詞 okay と「息の吸い込み」は重要な手続き的意味を相手に伝える。それに談話不変化詞 okay が表す手続き的意味は、連鎖的環境によって変化するようである。これからの研究は他の談話不変化詞の手続き的意味がいかに連鎖的環境に影響されるかに焦点を当てる。英語教育に携わっている人々にこの研究が役立てばありがたい。

＊会話分析表記記号

会話分析の表記記号を紹介するスペースがないため、省略する。しかし、会話分析の表記記号は「会話分析の手法」に詳しく紹介されている（サーサス、1998)。

＜引用文献＞

Bangerter, A., & Clark, H. (2003) "Navigating joint projects with dialogue". *Cognitive Science, 27*, 195-225.

Beach, W. (1990) "Language as and in technology: Facilitating topic organization in a videotext focus group meeting". In M. J. Medhurst, A. Gonzalez and T. R. Peterson (eds.), *Communication and the Culture of Technology*. Washington State University Press.

Beach, W. (1995a) "Conversation Analysis: 'Okay' as a clue for understanding Consequentiality". In S. J. Sigman (ed.), *The Consequentiality of Communication*. Lawrence Erlbaum.

Beach, W. (1995b) "Preserving and constraining options: "Okays" and 'Official' priorities in medical interviews". In G. H. Morris & R. J. Chenail (eds.), *The Talk of the Clinic*. Routledge.

Blakemore, D. (2002) *Relevance and linguistic meaning*. Cambridge University Press.

Borderia, S. P. (2008) "'Do discourse markers exist?' On the treatment of discourse markers in Relevance Theory". *Journal of Pragmatics, 40*, 1411-1434.

Button, G. (1987) "Moving out of closings". In G. Button & J. R. E. Lee (eds.), *Talk and Social Organization*. Multilingual Matters.

Button, G. (1990) "On varieties of closings". In G. Psathas (ed.), *Interaction Competence: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis*. International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis and University Press of America.

Condon, S. L. (1986) "The discourse functions of OK". *Semiotica, 60*, 73-101.

Condon, S. L. (2001) "Discourse ok revisited: Default organization in verbal Interaction". *Journal of Pragmatics, 33*, 491-513.

Condon, S. L. & Cech, C. G. (2007) "Ok, next one: Discourse markers of common Ground". In A. Fetzer & K. Kerstin (Eds.), *Lexical markers of common grounds*. Elsevier.

Du Bois, J. W., Chafe, W. L., Meyer, C., & Thompson, S. A. (2000) *Santa Barbara corpus of spoken American English, Part 1*. Linguistic Data Consortium.

Fischer, B. (2006) "Towards an understanding of the spectrum of approaches to discourse particles: introduction to the volume". In K. Fischer (ed.), *Approaches to discourse particles*. Elsevier.

Fraser, B. (2006) "*On the conceptual-procedural distinction*". Find articles. Retrieved September 19, 2009, from http://findarticles.com/p/articles/mi_m2342/is_1-2_40/ai_n17113874/

Fuller, J. (2002) "The influence of speaker roles on discourse marker use". *Journal of pragmatics, 35*, 23-45.

Jucker, A. H. & Smith, S. W. (1998) "And people just you know like 'wow': Discourse Markers as negotiating strategies". In A. H. Jucker & Y. Ziv (Eds.), *Discourse Markers*. John Benjamins.

Merritt, M. (1984) "On the use of O.K. in service encounters". In J. Baugh & J. Sherzer (eds.), *Language in Use: Readings in Sociolinguistics*. Prentice-Hall.

O'Neal, G. (2010)「談話の不変化詞 Oh の連鎖的位置と意味機能」、『言語の普遍性と個別性』、*1*、69−85。

Ruhlemann, C. (2007) *Conversation in context*. Continuum.

サーサス、G、(1998)『会話分析の手法』、マルジュ社。

Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973) "Opening up closings". *Semiotica, 8*, 289-327.

Schegloff, E. A. (2007) *Sequence Organization in Interaction*. Cambridge University Press.

Schegloff, E. A. (2010) "Some other "Uh(m)"s". *Discourse Processes, 47*, 130-174.

Stivers, T. (2010) "An overview of the question-response system in American English conversation". *Journal of Pragmatics, 42*, 2772-2781.

Terasaki, A. (2004) "Pre-announcement sequences in conversation". In G. Lerner (ed.), *Conversation Analysis: Studies from the first generation*. John Benjamins.

Tsui, A. B. M. (1994) *English conversation*. Oxford University Press.

主指導教員(福田一雄教授)、副指導教員（佐々木充教授・大竹芳夫教授）